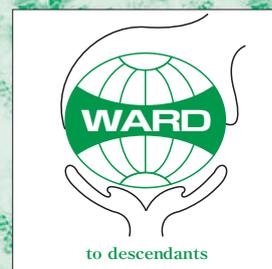


WARD

ウオード

World Association of Representatives for Descendants

— 世界子孫代理人会 —



未来と分かち合う 「縦の平等」の時代へ

もしあなたが、この地球を愛しているのなら
もしあなたが、子どもや孫が、
健康で平和に暮らせるよう望むなら
子孫に代わって、「未来を奪わないで」と、
声をあげませんか？



🌍 崩れて行く地球バランス

私たちの住む地球は、様々なバランスを崩しはじめ
気象災害は地球規模で頻発し、激しさを増し、
時間を追うごとに過酷な環境の中で
生きなければならなくなりました。

🌍 子孫に美しい地球を手渡そう

地球のバランスが崩れてしまったいま、地球で暮らす
すべての生命が存続するためにも
「今あるものを今いる人たちで消費してしまう」のではなく、
「地球を未来と分かち合うためのライフスタイル」に
変えていく時ではないでしょうか。

🌍 あなたもあなたの子孫たちのための代理人に！

一人ひとりが変われば、世の中は変わるはずです。
あなたも、子孫を代理し、自分に、そして周りに問いかける
「一人」になっていただけませんか？

故渡辺英男会長の
お言葉を
心に刻みましょう。



日頃からお元気な渡辺英男会長は、
WARD会報50号に向けて、更にWARDを
世に広めるべく呼びかけのチラシを作成途
上で、体調を崩され、緊急入院・検査でステ
ージ4の胆管がんが発見され、短期間の入院
の後、ご家族の皆さまに見守られながら2017年
9月18日、神様に召されました。

謹んでご報告申し上げます。

後日聖イグナチオ教会にて告別式を執り行い
ましたことも合わせてご報告します。

私たちにとって、青天の霹靂とも思える事
件でしたが、最後まで渡辺会長が携わり、完
成させた縦の平等の時代を要請するチラシ
をお届けし、同時に、添えられた感謝の言葉
をお届けして、一層の広がりを期待したいと
思います。

WARD副会長 松香光夫

WARD会員の皆様へ



1992年4月29日の創立以来、一緒に歩んでいただいていたありがとうございます。当日、カンガス神父様が出席され、「これは誰にも褒められない、何も報われない活動だが、日本で生まれるにふさわしいNGOだ。」とおっしゃいました。その通り恵まれることはありませんでしたが、皆さんと一緒に歩いていただきとても嬉しかったです。

これからの人間の存続を思うと、どうしても未来と分かち合う方向に歩まねばなりません。どうか何の得もない、誰からも褒められない、そういう活動を続けていただきたいと思います。また、そのような人たちと分かち合い、楽しんでいただければ、どんなに嬉しいことでしょう。本当に長い間、ありがとうございました。

WARD会長 渡辺英男



渡辺会長を偲んで

思い起こすこと

この度の渡辺会長の訃報に当たって哀悼の意を表明します。その意志は引き継いだ我々会員が世界に対して発信し続けます。

世界子孫代理人会が発足してから25年間、縦の平等の理念を子孫に代わって現代人に訴える活動を続けてきました。

この7月に本当に突然の病が分かってから、わずか2か月で天国に召され、いまだ信じられぬ思いで過ごしています。振り返れば1962年に飼料会社の研究所、(その後中央研究所に改名)に就職し11年間渡辺さんとは同じ職場で過ごしました。入社して1週間の研修期間の1日、渡辺さんの属する相談室(特約販売店へのサポート部門)で全国の販売網の話を受けた思い出があります。所内での交流は自由で様々な場で話し合いが行われ、個人的にも話をする機会が多い職場でした。鶴見区にあった研究所には9つの研究室があり牛、豚、鶏、魚、その他の生物を飼育し効率よい飼料を作成するため実験が行われていました。

この11年間はわが国で肉の生産量が増大し、半年くらいで出荷量が倍になることが続いた時代でした。従って職場は活気があり自由な研究ができました。ルーチンをこなせば学会発表も自由にでき年に2回は学会発表を行える時代でした。この時期に学会で知り合った京都大学の当時魚の研究では有名な教授と知り合いになり、さまざまなアドバイスを受けたことがその後の研究生生活の元となり、のちにその講座で学位を得ることができました。しかし10年目くらいから出荷もそう伸びなくなり研究もままならない時代に入りました。そんな時に大学時代の主任教授から獨協医科大学が開学するので行かないかという話があり、面接に行き、昭和48年に開学と同時に研究所長の了解を得て赴任することができました。

その後数年の間は研究所に時々訪問したので、渡辺氏とも話をする機会がありました。その時氏は新しいことを行う開発部へ移動し、10名内外の開発部では、本業関連ばかりでなく、まったく異業種にも入ることを行い始めました。例えば、夜間蛍光灯で虫を誘導し電気で殺す器具を開発し、農村部に販売したり、このように苦勞してさまざまな業種の研究開発を行い、会社で出来る仕事を採り販売することを続け、やがては開発部長になり部の人員も20名以上に増加したようです。その時ミツバチの餌を作って販売するのにミツバチの生態と世界のハチミツづくりがどのように行われているのを調べたのが発端となり、ミツバチの飼育を行うようになり、ここから“縦の平等”の思考が湧いて来たのだと思います。今ではその道の先達となり多くの人たちが指導を受けていました。

しかし、しばらくその仕事を続けていましたが会社の方針に限りをつけ、何か別な人生を送ろうと考えはじめ、その当時は公害と云われていた環境関係の仕事にいきつきました。きれいな自然の中で生存しているミツバチに関する仕事を始めようとするに至ったと聞いています。そのためには世界にどれくらいの養蜂家がいるかなど、ミツバチの餌を始めたときに調べた資料を基にもう一度調べ直し、世界には Apimondia (国際養蜂協会連盟) という 500 万人の養蜂家の団体があることもわかり、その団体に入り交流するための方策も考え英語の勉強も 2 年間行ったようです。そして Apimondia に入会し、長い間理事として団体の運営に携わり、外国の友人が世界世界の養蜂家とのつながりが広がり、理事としての講演も行っていたと聞いています。その時に現地で交流し、その後現地の情報をレポートしてくれたのだと思います。最近はこちらの方がいなくなり海外からの報告、例えば Duro Sulimanovic ザブレグ大学教授(クロアチア)のニュースレターへの報告などがありました。最近は見られなくなりました。

このような情報分析をした上で、WARD設立の少し前、渡



多摩川での雑草と水中生物の観察とゴミ拾いスケジュールの説明



20周年記念総会
小生の講演の左側で聞いている会長

辺さんから「会社を辞めて新しい人生を送ろうと考えた。どう思う」という電話があり。その当時医科大学へ赴任して、“地球環境と人類”という講座を開講していたところだったので、これは一緒に長い仕事が出来ると思い会社でいろいろ新しいことをやってきてその結論に達したのなら私も丁度同じ考え方でいるので、そのスタートをするのは大いに賛成と答えたことを覚えています。

それから1年後に地球環境問題に取り組むため、今の北と南の問題は水平思考でこの考え方では地球の資産を食いつぶしてしまう、子孫が生存できる地球環境を残すため世代を超えた縦の関係を考えるため子孫に代わって現代人にきれいな地球を残して欲しいとアピールする“世界子孫代理人会”を立ち上げたいので参加して欲しいという話がありました。

これはいままで世界にない考え方で、新しい環境運動でいいですね、すぐ参加しますという返事をした覚えがあります。WARDの立ち上げには会長の十分な熟慮と準備があったので、外国のメンバーも含めたあれだけの規模で発会式が出来たのです。これは会長が病床で最後にまとめた巻頭の「未来と分かち合う“縦の平等”の時代へ」というWARDの立ち上げに掲げた理念が現在も生きていることを示しています。

発会式でルイス・カンガス氏のあいさつに“声なき人の 声になろう”という、この考え方は日本でしかできない思考ですと述べられているように、日本人より外国人の方が感嘆の声を上げた知識人が多かったようです。

その当時は栃木に住んでいたので、節々の会合にしか出られませんでした。足尾銅山跡と田中正造記念館の視察に行ったとき4名の医科大学の学生の参加や、大学での講義から一般的にも環境問題で発言することができるようになりました。また、WARDの活動をしていたため環境福祉学会(本年度16年)の発足に参加でき監事を引き受け現在に至っております。医科大学では環境教育も含めて4年間(年間500万円)文部省から科研費をもらうことができ、“医療と人間教育”を発刊しその中には地球環境問題を多く取り入れることができました。

その後獨協中高へ赴任してからはNHKや新聞などを通して環境教育を世の中に広げることができ、中学生・高校生を環境運動に参加させることができたのもWARDの活動を行っていたからです。また東京私立中高協会の環境委員長として活躍できました。おかげさまで地球環境、子孫のために幾分か活動が出来たのも渡辺さんから誘っていただいたお蔭です。

中高でもビオトープ、給水紐を用いた栽培による屋上緑化、日本に昔から自生していたシイ・タブ・カシなどの常緑樹を植えることなどの実践教育で、環境教育を通して英数国の学力を上げることができました。

このように飼料会社時代を含めると36年間の付き合いでした。このような長い時間、同じ思いで過ごせた人がいたのは人生にとってありがたいことです。まだ一緒に活躍できると信じ切っていただけに残念で仕方ありません。

最後にニュースレターの発行に際して、会長一人で編集、印刷、配布まで手掛けていたことは今になって、遅ればせながら頭が下がる思いでいっぱいです。

謹んでご冥福を祈ると共に、感謝する次第です。

獨協医科大学名誉教授 永井 伸一

渡辺さんが私たちの心に ささやいたものは

いまはむかし、私がミツバチに関するブログを書いていたころ、渡辺さんとお会いしました。

当時、銀座ミツバチの会に入っていましたのでその縁かと思えます。それからWARDに入らせていただきました。

渡辺さんは当時、世界養蜂連盟(アピモンディア)のただ一人の日本人理事でいらっしゃったり、かつて日本養蜂協会の役員も勤められた経験があり、知識とコネクションで日本養蜂界のリーダーのひとりだったのではないのでしょうか。

当時から日本での都市養蜂の普及につとめられ、現在都市養蜂をやられている多くの人たちに有形無形の影響を与えられたのではないのでしょうか。

渡辺さんの言葉で忘れられない言葉があります。「養蜂をしてみるとね、人が集まってくるんですよ。みんな幸せそうな顔をしてね。横のつながりができるんですよ。いいことが起きるんですよ。蜂が幸せを運んでくれるのです」。

ひととひとの間でもポリネーションをしてくれているんだなミツバチは、と不思議な気持ちになりました。私はWARDでは新参者でしたので、WARDでの活動はほとんどしておらず、その部分で後悔しています。もっとアクティブにできなかったかと。

もしこの世からミツバチがいなくなったり、それを支配しようと思ったりした瞬間にあなた方の元から幸せは遠ざかります。

ミツバチのような渡辺さんが亡くなられて、世の中が不幸せにならないよう願うばかりです。

斎藤光弘



渡辺会長への感謝状



渡辺さんは26年間、それこそ私財をなげうって蜂飼いの仕事と並行して世界子孫代理人会(WARD)の活動を続けてこられました。表紙にありますように最後となった遺稿の中で、何の得もない、誰からも褒められない、そういう活動を続けてほしいとの願いが記されています。WARDは大きな組織立った団体ではありません。今回大きな礎は失いましたが縦の平等を願うWARDの精神は渡辺さんを通じて会員ひとりひとりの心の中に生きています。

私自身、これからも、そういう皆様と分かち合い、楽しみながら行動していきたいと思えます。今まで表彰するばかりであった渡辺さんをこの紙面にてWARDの会員から感謝状を贈りたいと思えます。長い間ありがとうございました。WARD 事務局長 田中智智

第26回WARD総会

5月7日(日)、13時~16時、神代植物公園会館の2階で第26回WARD総会が行われ、松香光夫副会長の司会の下、渡辺会長のあいさつに続き、2016年度活動及び会計報告がなされ、2017年度活動計画及び予算案が承認された。活動内容としては、青年層の会員が少ないという点でこれまでの会員や学生による奉仕活動内容の実践が紹介され、WARDとしても最近かなり普及してきたSNSを利用し、若い年代にアピールし、会員を確保していく必要性が討議された。

総会に参加した若者の意見として、フェイスブックやインスタグラムなどにWARDのサイトを立ち上げることにより、更に会員を増やす機会を持つべきであるとの提案があり、今後研究していくこととなった。また、2017年度の活動計画としてはSNSを使った



第26回WARD総会の様子

WARDの宣伝や、定例会の充実を図り、実際の活動としてミツバチプロジェクトや植林、環境をテーマとした研修会、研修旅行などを計画し、実施していくことが検討された。

14時からパネルディスカッションに入り、『隗より始めよ 足元から緑を増やそう』というテーマで、永井伸一WARD副会長から講演があり獨協高校の学生による植林についての活動や、進和学園を通しての苗の購入について話があり、学生たち若者の力を借りて植林活動に励むことにより、将来色々な宣伝や環境保全活動に繋がるとの論旨であった。

最後に会員同士により質疑応答を行い各々が意見や取り組みを出し合い、それぞれが個々に活動し、意識を変えていくことが必要であるとの会長からの意見があった。

書記 栗本雄介



永井先生による講演

2017年度活動方針

1. WARDの意義を宣伝し、仲間を増やす
2. 未来の資源と環境を予測し、公表する
3. 未来を奪われている子孫の存在を示し、その権利を主張する
4. 子孫の視点から問題を提起し、解決策を提示する
5. 子孫に寄与している個人や団体を鼓舞する
6. 「時間の物差」(時間軸)を普及し、「縦の平等」を推進する

2017年度活動計画

下記の部署で、それぞれの目標を設定し、活動する

1. 組織部
 - 1) 支部設置
 - 2) 会員拡大
 - 3) 定例会充実
2. 青年部 青年層の拡充(青年達の未来を保障するためにも)
3. 調査部 未来の資源と環境予測、公表
4. 教育宣伝部
 - 1) 機関紙発行
 - 2) WARD宣伝(リーフレット、パブリシテイ)
 - 3) 提言作成(未来と共有して平安に生きる方策など)
5. ホームページ運営部 ITの活用
6. 実践活動推進部 イベント企画
ミツバチプロジェクト、植林、屋上・壁面・道路緑化
7. 渉外部 外部との交流(国連環境計画他)
国連に、目標(持続可能・未来との共有)を達成する為の方針を掲げるよう、WARD案を示して、働きかける
8. 表彰部 子孫に寄与している個人・団体へ感謝状を贈呈する
9. 財務部 活動を支える資金調達

スローガン

—子孫代理人から現代人(自分を含む)への呼びかけ—

1. 子孫が生きられる環境と資源を残して下さい!
2. 負の遺産(有害物、借金)を残さないで下さい!
3. 環境と資源の価値を経済に組み入れて下さい!
4. 全ての価値判断は、現時点ではなく、子孫に及ぶ時間で行って下さい!
5. 資源循環型社会を築き、資源を保全し、環境を改善して下さい!
6. 自然に逆らわず、自然を活用して下さい!
7. 戦争は止めて、軍事費を縮小し、地球環境防衛に注力して下さい!
8. 世界を1つにして、環境改善と資源保全を地球一元で進めて下さい!
9. 未来の人達を苦しめる「原発」を廃止して下さい!

2016年度会計報告

2016.4.1~2017.3.31 単位 円

1. 収入の部		2. 支出の部	
予算	決算	予算	決算
繰越金	89,999	会報費(印刷・発送)	260,000
会費	430,000	会議費	50,000
寄付金	400,000	事務所費	360,000
雑収入	80,001	備品費	10,000
基金繰入	200,000	消耗品費	10,000
合計	1,000,000	通信費(電話・郵便)	40,000
		交通費	10,000
		印刷費	10,000
		宣伝費	120,000
		調査費(文献他)	20,000
		感謝状贈呈費用	40,000
		雑費	10,000
		繰越金	60,000
		合計	1,000,000

*備考:備考:WARD基金(2002年設立)700,000円は別途積み立ててある。

役員

理事:

Bruce Young	オーストラリア	榎本ひとみ	東京
藤田暁生	東京	干場英弘	東京
平野のり子	神奈川	井上凱夫	愛知
市川直子	東京	加藤正彦	神奈川
Carol Kirk	米国	Luis Cangas	スペイン
Mathias Lambrecht	ドイツ	松香光夫	東京
南 勲	青森	峰岸勝昭	東京

OFFICERS OF WARD

永井伸一	神奈川	大沢 力	東京
斎藤光弘	東京	佐藤 勝	東京
塩瀬 治	埼玉	鈴木 勲	静岡
鈴木健司	東京	田中淳夫	東京
田中国智	東京	山本禎紀	広島
吉永喜美子	東京		
監 事:	佐藤寛治	大 分	田口謙司
			神奈川

2017年度感謝状贈呈

未来の人達に貢献している次の方々へ、
子孫を代理して、WARDから感謝状が贈られた。

Ms.Nataliya Gudziy (ウクライナ)

ナタリア・グジーさんは、31年前6歳の時、チェルノブイリで被曝し、避難生活で転々とし、ウクライナのキエフに移住。ウクライナの民族楽器バンドウーラの音色に魅せられ、学校で日本語を学びながら音楽活動を開始。ウクライナの子供たちと広島、長崎、また東日本大震災を子供たちとの折り鶴の交換プログラムを行い、音楽を通して核の廃絶と平和を願う活動をして、国際理解と世界平和に貢献している。

Prof.Markus Borner (スイス)

マルクス・ボルナー教授は、過去40年間、アフリカにおける絶滅寸前の野生生物の保護や生態系の保全管理活動を行ってきた。タンザニアのセレンゲッティ国立公園で、種の保全は生態系全域での総合的保全が必要であり、活動の指針として我々が棲む惑星を健全に生存させるには、手つかずの自然、種の多様性、自然美が絶対的に不可欠であるという原則を掲げて活動し、生態系を維持する努力をしている。

太刀川瑛弼 様

NOSIGNER (ノサイナー) 代表、社会や未来により良い変化をもたらすためのデザインを理念に、グラフィック・プロダクト・空間デザインの領域にとらわれず、ビジネスモデルの構築やブランディングを含めた総合的なデザイン戦略を手掛けている。デザインを通して、社会が向うべき仕組み作りに関わり、知財を開放して、人と人を繋ぎ、社会に意義あるイノベーションを生み出している。

伊藤佳通 様

BAC仏教救援センター理事長、カンボジア難民との関わりに端を発し、タイ、バングラデッシュ、更に長い間ラオスと関わり続け、特に、ラオス政府からの要請

などに応じて当国内各地に、120校以上の小学校を建設、寄贈の世話をするなど、当該各地の子供たちの教育の機会を提供し、更に図書館の建設、地域住民の健康の向上にも貢献している。



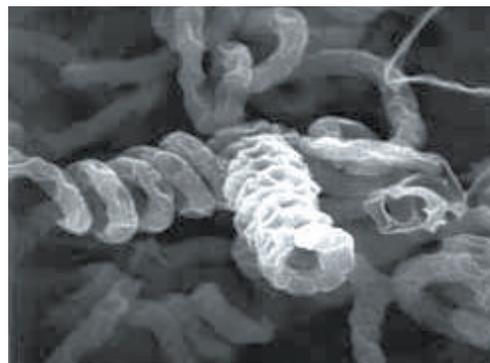
ラオスに完成した小学校



ラオスの子ども達

大村 智 様

北里大学特別栄誉教授、永年に亘り微生物が生産する有用な有機化合物の探索研究を行い、多数の新規化合物を発見した。中でも抗寄生虫抗生物質イベルメクチンは、熱帯地方の風土病オンコセルカ症に威力を示し、これまでに数億人に止まらない感染患者の救済に大きな貢献をした。北里研究所、女子美術大学の経営にも携わり、大きな成果を上げている。紫綬褒章、文化勲章などを受け、2015年にはノーベル生理学・医学賞の栄に浴した。



イベルメクチン



食糧危機の足音に耳をすませ

人類史が始まってから数百万年、そのほとんどは人口が安定していた。

その理由は食糧調達の方法が狩猟採集を基盤としたもので、不安定な流浪生活を送っていたからである。食糧がなければ人は餓死をするしかない。増加しないのは当然である。

しかし、約1万年前に農耕を始めたことにより様相は一変した。その地に定住し農耕を行うことで、安定した食糧供給が可能となったのである。昨今では産業革命に端を発した目まぐるしい技術革新により、さらに人口増加の速度は爆発的な勢いで加速している。

西暦元年には約1億人だったといわれる世界人口が1000年には約2億人、1500年には約5億人、1900年には約15億人、そして現在ではなんと約75億人に達そうとしている。今こうしている間にも、人口は1秒に3人ずつ増えている。国連が予測した2050年の世界人口は約91億人といわれ、これに伴いFAO（国際連合食糧農業機関）では、2050年までに増加する人口を全て養うために世界の農業生産を、70%増加しなければならないと示唆している。

しかしながら、農耕するには土地が必要であり、それは有限である。また、昨今問題視されている異常気象による不作も懸念材料の一つだ。徐々にではあるが、地球が人口増加を支えられなくなる日は確実に近づいている。現在でも食糧難に苦しむ飢餓人口は約8億人いるといわれている。世界規模で考えれば、9人に1人が飢餓で苦しんでいる。2017年の現在でだ。もはや食糧が当然のようにある時代ではなくなりつつあることを自覚しなければならない。

衣食足りて礼節を知るという中国の言葉があるが、人を人たらしめる礼節を学ぶためには、まず食糧が必要である。このまま推移すれば、いつしか食糧難となり、食糧の価格は高騰し、理性を失った人々の奪い合いが生まれ、究極的には国家間の戦争に発展する可能性もある。我々現代人は食糧に対する危機意識をもっと高めなければならない。

だが、先進国に住む現代人はその意識があまりにも乏しい。全く問題なく食べることが出来る食糧を賞味期限が切れたというだけの理由で、廃棄する人間のなんと多いことか。持続可能な世界を未来と共有するため、現代人は自国と現在が良ければいいという考えは捨てなければならない。

「時間」と「世界」という物差しで物事を考える必要がある。食糧難の未来を変えることが出来るのは現代を生きる我々だけなのだ。世界中で食糧難が起り、常に争



いが絶えず、一方で一握りの人間だけ恵まれている。そのような悪しき世界というバトンを未来の子孫へ渡す愚行は決して許されない。
平田洋一

編集後記及び会員各位へのお願い

9月18日に渡辺会長が急逝され、余りにも急なことでしたので我々事務局も9月24日に急遽緊急会議を開き、今後のWARDの運営について話し合いをもちました。まずは会長が最後の仕事として完成させた新しいWARDのパフレットと、会長の訃報をお知らせするニュースレター50号を皆様にお届けする事が先決との意見で一致し、原稿や写真がないまま副会長の永井先生、松香先生に執筆をお願いし、私の拙い編集でなんとかニュースレター50号を完成させることができました。渡辺会長とは50号という記念すべき発刊に際して今までお世話になった方々と会費制でもささやかな会を開き新しいWARDについて皆で話し合いたいとの希望をお持ちのようでした。今となってはそれも叶わず、とにかくあとを引き継いでみると何から何まで渡辺会長一人で運営されてきたことに驚かされているのが現状です。そこで、会員の方々には今後のWARDの運営を支援していただく方を募るとともに、WARD基金としての積立を新たに渡辺基金とし、地球環境を良い形で残すための基金としての有効利用を定例会でも議題としていきたいと考えますので皆様からの人的支援や財政支援を含め、今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

WARD事務局長 田中国智

WARD 50号(2017年10月29日発行)

発行人 永井伸一 松香光夫 定価150円

編集人 田中国智

WARD事務局 〒152-0003 東京都目黒区碑文谷5-4-21

TEL 03-5721-1992 FAX 03-5721-8383

http://www.ward-ngo.com